

アワーミュージアム

第 38 号 2008 年 10 月 31 日発行



人形師デコ忠について

澤 祥二郎 (友の会会員)

2008年7月6日(日)、大杉会長のお知り合いでデコ忠の孫にあたる堀恭子さんより、聞き取り調査を行いました。

デコ忠こと人形忠(本名 横山忠三郎、ほかに大江忠二郎、清水、福山を名乗り、福屋が屋号)は、天保11(1840)年2月2日に佐兵衛の長男として、名東郡南岩延村(現在の徳島市国府町)に生まれました。彼が6歳のときに、父佐兵衛が死亡し、少年時代の貧困の中、父の遺志をついで和田村で頭づくりの修行に励み、その制作をはじめたとされます。晩年は、能面・狂言面、恵比須の像も彫りましたが、明治45(1912)年6月9日、73歳で死去しました。

その作品は、徳島や淡路に数多く残っており、頭制作の力量の点では、天狗久に優るとも劣らない作技を示すとされます。14個の頭が、県の有形文化財に指定されています。

さて、当日、堀さんから大黒さんの像を見せていただきました。このような像は、当時1個100円もの値がついたものでした。デコ忠は作品が出来上がり、金が入るたびに、付近の子どもたちを呼び集めて菓子を与えたり、身体の不自由な人や遍路に金を振る舞ったりしたと伝えられています。人情味豊かな人物であったようです。

堀さんは小さいときに母につれられ、デコ忠のお墓参りに出かけ、上鮎喰の橋を渡って和田の道の堤の上の左側にお墓があったことを覚えているそうです。その場所こそがデコ忠の旧居。

今は跡形もなく草が生い茂っています。このお墓を何かの事情で移すことになり、堀さんの記憶では和田街道を進んだ右手のお寺に移したようだとのお話でした。和田で該当するお寺といえば西福寺。天狗久の墓所として知られる寺です。7月7日(月)にさっそく西福寺を訪れましたが、無住職の寺ということで、寺守り、墓守りの坂東さんに聞いたところ、北岩延の本光寺が管理しているとのこと、さっそく出かけました。住職は不在で奥様と話をしたのですが、「何かあった時に西福寺へ出かけるが、本光寺が西福寺のことを管理しているのではなく、明治中頃に西福寺が無住職になって、和田村が管理するようになり、本光寺では墓地のことも何もわからない。」とのことでした。調査の糸は切れませんでした。あとは西福寺の墓石を調べてみるくらいしか方法はありません。

デコ忠には三男六女がおり、長男人形友、二男人形泉、三男来太はそれぞれ父の元で人形づくりを学んでいたそうです。

人形友は安政7(1860)年4月2日、人形忠の長男(先妻の子)として和田村で生まれ、18歳で宇和島で独立。多数の名作を残し、大正11



堀さんが持参してくれた大黒像

(1922)年3月26日、63歳で死去。愛媛県の大谷文楽、菅原座、朝日文楽などに作品の頭が残っているとのこと。これも要調査です。

人形忠は人形忠の二男として和田村で生まれ、頭には人形忠、忠泉と銘を入れています。その後、北海道に移住し、仏師として有名になったそうですが、生年、没年は詳らかではありません。徳島に1個の娘頭が残っているとのことです。

三男の来太は、父に頭の制作を学び、後に大阪に行き、南天坊の弟子となり、仏門に入り、天然と称しました。昭和24(1949)年2月16日、阿波郡林町、出口二郎宅にて客死。作品に能面と多数の絵が残っているそうです。

この三兄弟の作品を発掘し、系統だって調査することは、デコ忠自身の作品を発掘・再評価することと併せて、天狗久以前に和田村に人形忠とその息子たちによる頭の制作の一つのエポックがあったことを立証する手だてになるでしょう。

7月8日(火)、国府コミュニティーセンターを訪問するも、デコ忠に関する何の手掛かりも得られませんでした。そこで、予定を変えて、



2007年11月に、博物館が寄託を受けた人形忠作の千歳、翁、三番叟の頭(個人蔵)。

人形恒として知られる国府町にお住まいの田村恒夫氏を訪問しました。氏は、阿波木偶人形師、阿波の名工、卓越技能者、阿波木偶制作保存会会長で82歳。お話ぶりもしっかりなさっており、「デコ忠のことを調べているのですが」という私の話に、どんな資料を持っているのかと問われ、彼自身の資料をあれこれと引っ張り出してくださいました。人形友の宇和島での頭の写真やら、久米惣七氏の書かれたものなど、色々を見せていただきました。田村氏は、久米惣七氏とは昭和47(1972)年頃より親しく付き合っており、惣七氏がとりわけデコ忠に関心を示していたことなどをお聞きしました。

デコ忠が有名になったのは、作家の石川淳氏が「諸国崎人伝」として、「別冊文藝春秋」に10回にわたって連載された伝記のうち、第56号(昭和32年2月28日発行)の「阿波のデコ忠」によるところが大きく、奇言、奇行の逸話はこの本が土台となっているようです。

私は、デコ忠の人形頭は、陀羅助頭と太公望、娘、管丞相、徳兵衛の5点を写真で見ただけであり、実物を詳しく見ることでデコ忠の頭についてより理解が深まるように思っています。また、彼の息子たちの作品とデコ忠の作品を一同に集め、展示・解説が出来れば、天狗久を生んだ和田村の人形師の高いうねりの一端をうかがうことができるのではないかと考えています。

写真の人形忠作の頭は、
2009年1月20日(火)～4月5日(日)
博物館の部門展示で公開予定です。

会報「アワーミュージアム」 の原稿募集

会員の皆さんの原稿を募集しています。専門分野での研究成果はもとより、身のまわりのできごとで、博物館に関係のあることなど、どんな原稿でも結構です。どんどんお寄せください。

多くの方々の原稿をお待ちしています。

文化財としての「二宮金次郎像」

石尾 和仁 (友の会会員)

20世紀初頭の日本は、軍事費の増大をともないながらロシアとの緊張関係を深めていった。日露戦争に勝利した日本は「満州」進出のきっかけをつかむが、その一方で国民の経済生活は疲弊していく。特に農村部の荒廃は激しく、桂太郎内閣は「地方改良運動」を推進することになった。この時代に国民の精神生活に浸透した人物が二宮尊徳（金次郎）である。1903（明治36）年から始まった国定教科書制度の中で二宮尊徳が重視され、修身の教科書に取り上げられたのが大きな理由であるが、彼の報徳仕法は政府にとっても国民教化にすこぶる好都合なものであったと思われる。1911（明治44）年には「二宮金次郎」という歌が文部省の『尋常小学唱歌』にも取り上げられており、その歌詞にも次のようにある。

骨身を惜しまず仕事をはげみ
夜なべ済まして手習読書
せわしい中にもたゆまず学ぶ
手本は二宮金次郎

まさしく、国民生活が困窮していくときに、二宮尊徳を模範的な人物に仕立てることによって、「国民国家」としての一員たることを国民に求めてきたというのが、当時の政府の政策意図であったと考えられるのである。『おじいちゃん おば

あちゃんが伝える戦争』（日本絵手紙協会 2005）にも、「登下校の時には、奉安殿に最敬礼。二宮尊徳先生の銅像には敬礼を忘れた事の無い日々でした」という女性の回顧談も掲載されているとおり、多くの国民は二宮尊徳を模範として敬愛する生活を過ごしていたのであろう。確かに、徳島市内でも富田小学校や一宮小学校に残る金次郎像（写真1・2-1・2-2）の台座には「紀元二千六百年」と刻まれており、天皇制に基づく国民統合のための媒介としての役割を担わされていたのではないかと思わせる要素がある。

しかし、小学校に設置された金次郎像は、政府の意図的な政策ではないことが明らかにされている。昭和初期に農村改良家・農村経営の指導者としての尊徳像ではなく、柴を背負って「大学」を読む金次郎像が各地の小学校に林立していくことになったが、薪や柴を背負う金次郎像は修身教科書には登場しないので、この図像が必ずしも政府の意図で生まれたものでないことは確かである。

実際のところは各地の篤志家たちが教育的配慮から彼の勤勉さを浸透させる意図をもって寄贈したのであるが、当時広まっていた農山漁村経済更正運動と相俟って、さらには1928（昭和3）年の御大典記念、1933（昭和8）年の「尊徳八十年祭」などが背景になって金次郎像建立がブームとなったようである（松尾2006）。

ところで、金次郎像には銅像・石像・セメント像・陶像（備前焼）があったが、戦局が深ま



写真1 富田小学校の二宮金次郎像



写真2-1 一宮小学校の二宮金次郎像

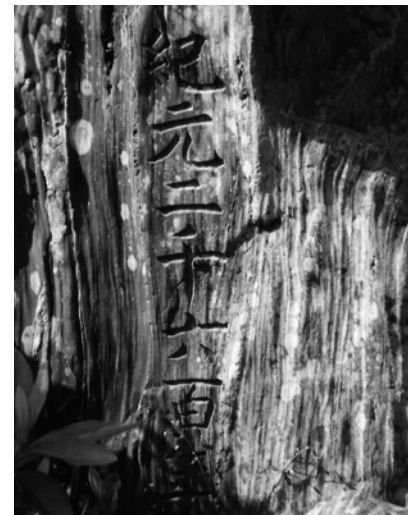


写真2-2 一宮小学校の二宮金次郎像の台座銘

るなかで銅像のものは供出させられることになった。この供出に際しては、児童の心情に配慮して無造作に運び出すということせず、^{おう}応召する形をとり、壮行会を挙げるなど出征兵士の扱いであった（松尾 2006）。このことも二宮尊徳を国民教化の手段として用いたとする認識が広まった理由かも知れない。

こうした金次郎像も、戦後十数年が経過し高度経済成長期になると、交通安全教育が^{とな}唱えられるようになり、急速に姿を消すことになった。負薪読書の姿勢はまさしく交通安全教育には不都合な存在となったのであろう。高度経済成長の開始や交通事情の激変が金次郎像の^{すいたい}衰退をもたらしたのだと考えられている（井上 1989）。

このような経過をたどった二宮金次郎像は、今となってはたいへんめずらしい貴重なものであるという認識が、就職するまで大阪で生活していた私にはあった。もうすでにこのようなものは大変貴重でなかなか見られないものだという思いを持っていたが、娘の徳島市上八万小学校入学式に参列したときに、同校の校庭で目に飛び込んできたのが二宮金次郎像であった（写真3）。高校教員の仕事をしていることもあって、早速授業中に生徒たちに金次郎像の話、そして上八万小学校にそれが残っていることを話したところ、「僕も小学校で見た」「私も小学校で見た」という多くの情報を提供してくれた。私の勤務していた高校の生徒たちが卒業した小学校のい



写真3 上八万小学校の二宮金次郎像



写真4 昭和小学校の二宮金次郎像

くつかには確かに残っていたのである。先述した富田小学校や一宮小学校、さらに徳島市昭和小学校（写真4）や石井町^{あいほた}藍畑小学校（写真5）のものには台座に篤志家の名前も刻まれている。鳴門市林崎小学校の金次郎像の台座にも「報徳」の文字とともに昭和7年建立と記されているので（写真6）、やはり満州事変の翌年のことであり、軍部が台頭していく状況の中で建立されたものであり、「^{けんやく}儉約」が求められたのであろうか。なお、昭和小学校・徳島市福島小学校のものは陶像である。その他、徳島市八万小学校などにも残されていることを高校生たちは教えてくれた。全国的な^{すうせい}趨勢としては漸次減少し、貴重なものとなっている金次郎像が県内のいくつかの小学校にはまだ残されている。それぞれが建立された背景には、その各時代の息吹を感じ取ることができるものがあり、「文化財」としての価値をもつものであると考える。校舎改築や老朽化によって解体の危機に直面することが今後生



写真5 藍畑小学校の二宮金次郎像



写真6 林崎小学校の二宮金次郎像

じること予想されるが、関係者の理解と努力によって金次郎像が守られることを願っている。

小稿は、娘の小学校入学を契機に金次郎像に関心を持ったことから高校生たちに話すなかで記した駄文^{だぶん}であるが、何気ない金次郎像にも歴史があることを感じていただけたなら、また「文化財」としての金次郎像の見直しにつながれば幸いである。

(参考文献)

- 井上章一 1989 『ノスタルジック・アイドル二宮金次郎』
新宿書房
日本絵手紙協会編 2005 『絵手紙で見る 20世紀第6巻』
同協会
松尾公就 2006 「二宮金次郎像の変遷と『応召(徴)』」
『昭和のくらし研究』4号 昭和館

友の会行事報告

虫と植物の観察会

- ◎ 7月6日(日) 10:00～12:00
◎ ^{そのせがわかせんじき} 園瀬川河川敷にて 参加者12名
◎ 行事担当 ^{ゆきなりまさあき} 行成正昭(友の会役員)
^{いばらぎ やすし} 茨木 靖(博物館学芸員)
^{やまだ かずたか} 山田量崇(博物館学芸員)

◎ 概要

天気恵まれ暑さの厳しい中での行事となったが、それでも園瀬川の^{かわも}川面を渡る風に心地よさも感じる事ができた。この行事には、親子

連れの方を中心に12名の方々が参加してくださいました。また、県立博物館の植物担当の茨木学芸員、昆虫担当の山田学芸員が同行して下さり、それぞれの専門の立場からご指導をいただきました。移動能力を持つ虫については、山田学芸員からネットの使い方、採集の仕方、標本の作り方などの説明を聞いた後、参加者は、暑さをもともせず、各人思い思いに大きな捕虫網^{ほちゅうあみ}を手にし、我を忘れて虫を追い回したり、足もとの植物を時間が経つのも忘れて夢中で探した。その後、両学芸員から採集した虫や植物について解説していただき、本日の成果を共に分かち合った。時期が少し早かったためか、多く見られる筈^{はず}のバッタ類を少ししか見ることができなかったが、このような小さな河川敷にも、それなりに色々な虫や植物が生活していることを実感していただけたことと思う。殊^{こと}に子どもさんは感性が豊かなので、少なからず驚きや発見があったことと思うが、行事担当者の欲目だろうか。(行成)

◎ 植物^{よもやまばなし}四方山話

当日は、バッタの観察にはちょっと早かったようでしたが、トンボなどがいろいろ採^とれて何よりでしたね。さて、植物はと言いますと、澤さんの感想にもありますように、メハジキ^{はなざか}が花盛りでした。“メハジキ”とは、ちょっと変わった名前ですが、これは、昔の子供達が、この植物の茎^{くき}を切って、まぶた^{まぶた}で挟んで遊んだことに由来するそうです(私は試していませんけど)。このメハジキ、随分^{ずいぶん}と大きな植物なのです



虫と植物の観察(園瀬川河川敷)

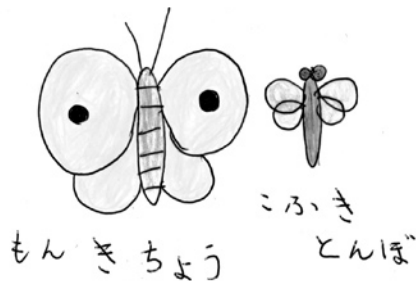
が、花が咲かないとどうもぱっとしない感じで目立ちません。葉もキク科のヨモギのようで、“冴えない雑草”と言った感じです。でも、花はとても綺麗な赤紫色で、一目でシソのなかまとわかります。それは、花が左右対称で、唇弁と呼ばれる花びらが大きいという特徴があるからです。また、茎を見ると、切り口が四角くなっています。これもシソ科の特徴。二枚の葉が対になってつくのも、シソ科のわかりやすいチェックポイントになります。

それから、ツルヨシもたくさんありましたね。ツルヨシは、イネやススキと同じ、イネ科の植物です。よく似たものに、ヨシやセイタカヨシがありますが、流れの速い川岸などに、長いツル（ほふく枝）を出して繁茂するのは、大概このツルヨシです。これに対して、ヨシは、もっと水の流れの穏やかな湿地帯などに好んで生える傾向があります。暑い一日でしたが、いろいろな生き物が観察できました。またいづれ皆さんと身近な生き物観察ができればなと思います。（植物担当：茨木）

参加者の声

○三宅 宏典・寛子・羅衣・竜樹

虫と植物の観察会に参加して、子どもたちは新しい体験ができたと思います。虫一つでも、多くの種類があることや、植物の見方を教えていただいたことは、良かったと思っています。



○澤 祥二朗

当初は5名の申し込みだったが、広報に力を入れた結果、12名の参加となり、全部で15名の人員で会の行事ができました。梅雨明けといっても蒸し暑い中で久しぶりに捕虫網を、それも

博物館友の会の本格的なものを手に持ち、50年も昔にタイムスリップして、昆虫少年になった様な気分でした。収穫はめばしいものもなく、現代の少年たちには、とうてい及ぶところではありませんでした。

「コフキトンボ」や「アオモンイトトンボ」などのトンボは捕れましたが、バッタがまだ個体が小さいのか、あまり目立ったものではありませんでした。植物も流れのある場所に生息する「ツルヨシ」や赤紫の花をつける「メハジキ」。葉っぱがキク科に似たところがあるのですが、実はシソ科の仲間だとか。もう一つ、「メリケンガヤツリ」。これら3種が園瀬川河川敷で特徴的に見られる植物です。植物も昆虫も、何度も名前等を聞いて、覚えているつもりでも、なかなか身近にあって目立たない姿形のものも忘れることも早いような気がします。



メハジキの花

当日は、和田さんの代わりに行成さんに行事を担当していただき、昆虫担当の山田学芸員、植物担当の茨木学芸員のサポートもあり、色々と知らなかった事が分かり、知的好奇心を満たすことができました。それと、観察会で思ったことですが、外来の生物が帰化して、ますます固有種が減っていくことは止めることはできないことだなあと感じました。それと、河川敷でバーベキューなどをした後の処理にもっと大人は気を配るべきだと思いました。市街地の近郊の自然は、もっとみんなが大切にすべきだという思いも湧いてきました。

暑い夏の日でしたが、色々と覚えたり、考えさせられたりすることの多い行事でした。

夜の昆虫採集会

- ◎ 7月12日（土） 19：00～21：00
- ◎ 文化の森にて 参加者 29名
- ◎ 行事担当 ゆきなりまさあき 行成正昭（友の会役員）
やまだ かずたか 山田量崇（博物館学芸員）
- ◎ 概要

夜間のコンビニの灯りとか街灯がいでうに沢山の昆虫がその周囲を飛び回っているのは、よく見る光景である。夜間に活動する昆虫は、光に集まる習性をもつものが多いので、それらを採集する最も有効な方法は、光に頼ることである。そこで、今回の夜の昆虫採集会でも、文化の森総合公園内のカスケード（小滝）のある知識の森広場に白い幕（スクリーン）をセットし、その前に光源（ブラックライト）を置き、光を慕って集まってくる昆虫を採集する灯火採集法とうかを行った。夜の観察会にもかかわらず、29名もの方々が参加してくださった。午後7時頃から開始、日がだんだんと暮れていくにつれ、飛来してくる昆虫も多くなっていった。それらの中にはカメムシ類、甲虫（カミキリムシ、コガネムシ、ゴミムシの仲間など、蛾がの仲間、羽アリ等々、それなりに集まりそうなものは観察することができた。子どもさんたちは、スクリーンに集まってきて飛び回る昆虫を真剣に追いかけたり、新しい虫が現れると歓声を上げたり結構楽しまれている様子だった。

灯火採集法は極めて有効な手段きわであるが、そ



灯火採集法による採集の様子（文化の森）

の日の気象条件（風力、風向、気温、晴雨）、また月齢（月の満ち欠け）によっても影響される面が大きい。当日は晴天、無風状態、極度に乾燥気味、下弦の月といった条件がマイナス要因として働いたのか、実施前に期待していたほどには虫が集まらなかったのが残念であった。これから個人的に異なった環境で灯火採集法を試みられようと考えておられる方には、今回の行事で実施したことを参考にさせていただけるのではないかとも思った。

今回の採集会を執り行うに当たって、機材の光源、スクリーン等の現地へ持ち運び、セット全てを県立博物館の方々が準備してくださった。また、大原館長、山田学芸員には専門の立場から指導していただいた。（行成）

◎夜のコンビニは昆虫天国!?

昆虫を効率よく採集するには、昆虫の習性を利用するのが一番です。その代表的なものが、今回行った「灯火採集法」です。林の中や山野の見晴らしのよい場所にシートなどの白幕をセットし、蛍光灯やブラックライトをつるして意図的に昆虫をおびきよせる方法です。この方法を使えば、思わぬ珍品（めったに採れない種類のこ）に出会えたりするわけです。もちろん、光に寄ってこない虫もいるので、すべてがこの方法で採れるわけではありません。また、その日の気象条件などによっても大きく影響されまいりおもてじます。数年前に沖縄県の西表島で灯火採集を行った時は、一晩に数千から数万頭もの昆虫が飛来し、驚喜きょうきのうちに夜通し採集を続けたことがありました。その時は、月明かりもなく、気温や湿度が高くてとても蒸し暑い夜でした。



奄美大島での灯火採集法による採集の様子

今の時代、日本中どこへいってもコンビニエンスストアを見ることができます。夜になれば煌々と明かりを放ち、人だけでなく昆虫たちをも引きつけてしまいます。とくに山奥や郊外のコンビニは昆虫採集をするのに打って付けの場所で、よい獲物に出会えることもしばしばです。コンビニのガラスを真剣に眺める様はいささか怪しいですが、皆さんも一度観察してみたいかがですか？（動物担当：山田）

参加者の声

○山崎 陽一・成晃

灯火採集法での昆虫採集は、テレビ等で見たことはありましたが、実際に見て経験したのが初めてであり、良い勉強になりました。ありがとうございました。

○三宅 宏典・寛子・羅衣・竜樹

夜の昆虫採集会に参加して、子どもたちはライトに集まる虫を捕るのは初めてだったので、大変楽しみにしていました。親が思う以上に知らなかった虫、名前を教えていただいた虫は、印象深かったようです。ありがとうございました。



大井さんの説明を聞く参加者

だはがきは、一週間乾燥機の中で乾燥されていました。

2回目は、乾燥した海藻押し葉をはがきに仕上げる作業をしました。布をはがすと、ぱりっとな乾燥した鮮やかな色の海藻が現れました。鮮やかな色の海藻の上に和紙のシールを貼るとやわらかい雰囲気のと装絵はがきができ上がりました。遠くの友達に送りたいようなはがきができました。葉や壁掛けにもなるすばらしいでき上がりでした。（大井）



海藻おしばづくりに挑戦

友の会行事報告

海藻おしばでポストカードをつくらう

- ◎ 8月21日（木）、28（木）
- ◎ 博物館実習室にて 参加者13名、6名
- ◎ 行事担当 大井文香（友の会会員）
- ◎ おがわ まこと 小川 誠（博物館学芸員）

概要

1回目は生の海藻をはがきの上に並べる作業をしました。それぞれの参加者が好きな海藻をとって、はがきの上にならべました。2時間があったという間に過ぎていきました。水分を含ん

参加者の声

○山崎 佳子・絢世

こんど海に行ったら海藻をとりたいです。（絢世）
子どもと共に楽しく作業ができました。自然界にある色を、あまり変えることなく保存できるのに驚きました。親戚や祖父母に残暑見舞いを出したところ、とても好評でした。どうもありがとうございました。（佳子）

第38号

No.38
October 2008
Tokushima Prefectural Museum

徳島県立博物館友の会会報
アワーミュージアム

2008年10月31日発行：徳島県立博物館友の会
〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館内
TEL 088-668-3636 FAX 088-668-7197
E-mail: mus-fukyu@mt.tokushima-ec.ed.jp